

## 府内で分離した *Salmonella Pullorum* の分子疫学的解析

中丹家畜保健衛生所  
加藤あかね 種子田功

【はじめに】平成22年7月、府内1種鶏場で家きんサルモネラ感染症が発生。種鶏候補鶏3羽より *Salmonella Pullorum* (S.P) を分離、その後、疫学関連9農場19羽からもS.Pを分離した。S.P計22株の分子疫学的解析を、プラスミドプロファイル法 (PP法) 及びパルスフィールドゲル電気泳動法 (PFGE法) により実施した。【方法】分離菌の同定は病性鑑定マニュアルに基づき実施した。PP法は、H.C.Birnboim and J.Doly法により抽出後、電気泳動を行った。PFGE法は秋庭らの方法によりプラグを作製、制限酵素 *Xba* で処理後、電気泳動を行った。【結果】22株全ての生化学的性状は、乳糖、白糖及びズルシット非分解、ブドウ糖分解、硫化水素非産生、リジン産生、インドール非産生、クエン酸塩利用能陰性、非運動性で、血清型別検査によりS.P(09:-:-)と同定した。PP法では全て病原性プラスミドの保有を確認。機能不明プラスミドは、A~Dの4パターン (A:18株、B:2株、C:1株、D:1株) を認めた。PFGE法では、全て同一の泳動像を示した。【まとめと考察】PFGE法の結果より、分離したS.P22株は分子疫学的に近縁で、汚染源が同一である可能性が示唆された。PP法では一部異なるパターンを認めたが、本菌が感染後に、様々な要因で、プラスミドに若干の変化が生じた可能性があるかと推察した。